

科目名	領域別看護過程Ⅰ		履修年次	1 年次
科目区分	専門分野	単位数(時間)	1 単位 ( 30 時間)	
講師名		講師の実務経験の有無	有 ・ 無	
<p>目的: 看護過程の基礎的理解をもとに、各領域で対象を理解し、看護を実践する基礎的能力を養う。</p> <p>目標: 1 各領域の看護過程におけるアセスメントの視点を理解できる。 2 各領域の対象特性や看護の特徴を踏まえて、看護を実践するための基礎的知識と技術を習得できる。</p>				
授 業 計 画				
単元	時間	内 容	方 法	
1 成人老年領域の看護過程	10	1 成人・老年領域における看護過程の特徴 2 アセスメントの視点 (1) 社会的役割の遂行 (2) 加齢現象の考慮や価値観の尊重 3 事例に基づく看護過程の展開(周術期における看護過程) (1) アセスメントから看護上の問題の明確化 (2) 看護計画の立案	講義 個人ワーク GW	
2 母性領域の看護過程	10	1 母性領域における看護過程の特徴 2 アセスメントの視点 (1) 褥婦のアセスメントの視点 ① 身体的側面:退行性変化と進行性変化 ② 心理的側面:ルビンの心理的变化と母子相互作用 ③ 社会的側面:役割変化への適応・母親役割の獲得 (2) 新生児のアセスメントの視点 ① 子宮外生活への適応過程 ② 生理的变化の経過と逸脱 3 事例に基づく看護過程の展開 (1) ウェルネス型看護診断(マタニティ診断) (2) 看護計画の立案:同一性と個別性	講義 個人ワーク GW	
3 在宅領域の看護過程	10	1 地域・在宅領域における看護過程の基本と特徴 2 アセスメントの視点 (1) 療養者と家族全体のアセスメント (2) 居住環境のアセスメント (3) 社会資源のアセスメント (4) 家族の介護力と介護負担のアセスメント (5) 経済力のアセスメント (6) 居住地域のアセスメント 3 事例に基づく看護過程の展開 (1) アセスメントから看護上の問題点の明確化 (2) 看護計画の立案	講義 個人ワーク GW	
評価方法	各単元、時間数に評価も含む。評価方法は下記による。 ・レポート ・課題の提出状況 ・出席状況や GW 等への参加態度 ・筆記試験 } 総合的に評価する。			

<p>必須資料 (テキスト)</p>	<p>系統看護学講座 専門分野 基礎看護学② 基礎看護技術 I (医学書院)  系統看護学講座 専門分野 基礎看護学④ 臨床看護総論 (医学書院)  系統看護学講座 別巻 臨床外科看護総論 (医学書院)  系統看護学講座 専門分野 母性看護学② 母性看護学各論 (医学書院)  系統看護学講座 専門分野 地域・在宅看護論② 地域・在宅看護の実践 (医学書院)  看護がみえる④ 看護過程の展開 (メディックメディア)</p>
<p>参考資料</p>	<p>・授業資料は適宜印刷のうえ、配布する。</p>
<p>履修上の 留意事項</p>	<p>・基礎看護学:看護共通基本技術Ⅲ(看護過程)の授業を復習して臨むこと。  (授業資料を読み返す、基礎看護技術のテキストを読み返す、授業資料を持参する、基礎看護学で作成した看護過程の展開を持参する 等)  ・GW には積極的・主体的参加姿勢を望む。  ・事例を用いた看護過程の展開は、実習で活用できるように自分自身で十分に「考える」こと。</p>

科目名	領域別看護過程Ⅱ		履修年次	2 年次
科目区分	専門分野	単位数(時間)	1 単位 ( 20 時間)	
講師名		講師の実務経験の有無	有 ・ 無	
<p>目的: 看護過程の基礎的理解をもとに、各領域で対象を理解し、看護を実践する基礎的能力を養う。</p> <p>目標: 1 各領域の看護過程におけるアセスメントの視点を理解できる。 2 各領域の対象特性や看護の特徴を踏まえて、看護を実践するための基礎的知識と技術を習得できる。</p>				
授 業 計 画				
単元	時間	内 容		方 法
1 小児領域の看護過程	10	1 小児領域における看護過程の特徴 2 アセスメントの視点 (1) 成長・発達と健康障害の影響 (2) 日常生活行動の獲得状況(自立) (3) 家族関係 3 事例に基づく看護過程の展開 (1) アセスメントから看護上の問題の明確化 (2) 看護計画の立案		講義 個人ワーク GW
2 精神領域の看護過程	10	1 精神領域における看護過程の特徴 2 アセスメントの視点 (1) 身体状況 (2) 疾患に伴う日常生活動作能力への影響 (3) 治療の継続性(病識や社会資源) (4) 家族関係 3 事例に基づく看護過程の展開 (1) アセスメントから看護上の問題の明確化 (2) 看護計画の立案		講義 個人ワーク GW
評価方法	各単元、時間数に評価も含む。評価方法は下記による。 ・レポート ・課題の提出状況 ・出席状況や GW 等への参加態度 ・筆記試験 } 総合的に評価する。			
必須資料 (テキスト)	系統看護学講座 専門分野 基礎看護学② 基礎看護技術Ⅰ(医学書院) 系統看護学講座 専門分野 小児看護学② 小児臨床看護各論(医学書院) 精神看護学Ⅱ 精神臨床看護学(ヌーヴェルヒロカワ) 看護がみえる④ 看護過程の展開(メディックメディア)			
参考資料	・授業資料は適宜印刷のうえ、配布する。			
履修上の 留意事項	・基礎看護学:看護共通基本技術Ⅲ(看護過程)の授業を復習して臨むこと。 (授業資料を読み返す、基礎看護技術のテキストを読み返す、授業資料を持参する、基礎看護学で作成した看護過程の展開を持参する 等) ・GW には積極的・主体的参加姿勢を望む。 ・事例を用いた看護過程の展開は、実習で活用できるように自分自身で十分に「考える」こと。			

科目名	看護研究		履修年次	2 年次
科目区分	専門分野	単位数(時間)	1 単位 ( 20 時間)	
講師名		講師の実務経験の有無	有 ・ 無	
<p>目的: 看護研究の概念を理解し、研究成果を看護実践に活用する基礎的能力を養う。</p> <p>目標: 1 看護研究の意義と方法の概要を理解できる。 2 看護実践の振り返りの意義と方法を理解できる。</p>				
授 業 計 画				
単元	時間	内 容	方 法	
1 看護と研究	11	1 看護における研究 (1) 看護における研究の役割と意義 (2) 研究における倫理的配慮 2 看護研究の分類と特徴 (1) 研究デザインによる分類と特徴 3 研究プロセス (1) 研究課題の選択 (2) 研究目的 (3) 文献検索と文献検討 ア 文献検索の意義 イ 文献検索の資料と活用の仕方 (4) 概念枠組みの設定 (5) 仮説の設定 (6) 研究方法の選定 (7) 研究計画書作成 (8) 研究データの収集・分析 (9) 結果とその解釈 (10) 論文作成と発表 4 ケーススタディのプロセス	講義 GW	
2 看護実践の振り返りの意義と方法	8	1 看護実践の振り返りの意義 2 自己の看護実践の振り返り	講義 演習 GW	
試験	1			
評価方法	筆記試験 レポート			
必須資料(テキスト)	看護のためのわかりやすいケーススタディの進め方 (照林社) 看護研究のための文献検索ガイド (日本看護協会出版会)			
参考資料	・授業資料は適宜印刷のうえ、配布する。			
履修上の留意事項	・自己の看護実践を客観的に振り返る(省察)ことは、自己の看護実践能力を高めるために重要である。 ・また、卒業後は臨床実践家として看護研究をまとめることも出てくるため、卒後に活用できる基礎的知識の習得は必要である。積極的な学習姿勢を望む。 ・GW や演習には積極的な授業姿勢で臨むこと。			

科目名	災害看護と国際看護		履修年次	2 年次
科目区分	専門分野	単位数(時間)	1 単位 ( 30 時間)	
講師名		講師の実務経験の有無	有 ・ 無	
<p>目的: 災害医療と災害看護の基礎的知識を理解し、災害時に必要な技術を習得するとともに、グローバルな視点で社会情勢と健康問題をとらえる必要性を理解する。</p> <p>目標: 1 災害の概念と災害医療・災害看護の特徴を理解できる。 2 被災者の健康と生活上のニーズ及び災害各期の看護を理解できる。 3 災害における看護の役割を理解し、災害時に必要な看護技術を習得できる。 4 国際的な視点で社会情勢と健康課題をとらえ、看護の国際協力・災害救援の必要性としくみを理解できる。</p>				
授 業 計 画				
単元	時間	内 容		方法
1 災害医療と看護の特徴	6	1 災害の概念 (1) 災害の定義 (2) 災害のサイクル (3) 災害の分類 2 災害医療の特徴 (1) 災害医療の特徴 (2) 災害医療と救急看護の相違 (3) わが国の災害医療体制 ア 災害支援ネットワークシステムと情報源 イ わが国における災害対策 ウ 茨城県の災害対策と災害医療拠点病院 エ 居住地の災害対策 (4) 災害医療の3T ア トリアージ           イ 治療           ウ 搬送 (5) 災害に関する法律 3 災害看護の定義と特徴 (1) 災害看護の定義 (2) 災害看護の特徴 (3) 災害看護活動の要素		講義
2 被災者の健康問題と災害看護の実際	9	1 災害が人々の健康や生活に与える影響 (1) 災害の種類別にみた健康問題 ア 自然災害   イ 人為的災害   ウ 特殊災害   エ 複合災害 (2) 災害の時期別にみた健康問題 ア 超急性期   イ 急性期           ウ 慢性期   エ 静穏期 (3) 避難生活の場所別にみた健康問題 2 災害看護の実際 (1) 災害サイクルに応じた看護活動 ア 災害超急性期の看護 イ 災害亜急性期の看護 ウ 災害慢性期の看護 エ 静穏期の看護		講義 GW

		<ul style="list-style-type: none"> <li>(2) 活動の場における看護 <ul style="list-style-type: none"> <li>ア 救護所における看護</li> <li>イ 避難所における看護</li> </ul> </li> <li>(3) 感染対策</li> <li>(4) 被災者に対するこころのケア</li> <li>(5) 救援者のストレスとこころのケア</li> </ul>	
3 災害時に必要な看護技術	8 (4)	<ul style="list-style-type: none"> <li>1 緊急を要する診療 <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 心肺停止状態</li> <li>(2) ショック状態</li> <li>(3) 外傷・熱傷・熱傷</li> <li>(4) 小児の溺水</li> </ul> </li> <li>2 トリアージ(START 方式)</li> <li>3 心肺蘇生法(CPR・AED) <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 頭部後屈あご先挙上法による気道確保</li> <li>(2) 補助器具による人工呼吸</li> <li>(3) 心臓マッサージ</li> <li>(4) 除細動</li> </ul> </li> <li>4 傷病者の搬送</li> <li>5 応急手当</li> </ul>	講義
	(4)	<ul style="list-style-type: none"> <li>トリアージの実際</li> <li>心肺蘇生法の実際(CPR・AED の使用)</li> </ul>	演習
4 看護の国際化と災害救援	6	<ul style="list-style-type: none"> <li>1 看護とグローバル化 <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) グローバリゼーションの概念</li> <li>(2) グローバルヘルス <ul style="list-style-type: none"> <li>ア 世界共通の健康目標</li> <li>イ 国家・地域間の健康格差</li> </ul> </li> <li>(3) 看護のグローバル化 <ul style="list-style-type: none"> <li>ア 国際保健における日本の役割</li> <li>イ 諸外国の看護制度</li> <li>ウ 国際社会における看護の対象 <ul style="list-style-type: none"> <li>(ア) 在留外国人</li> <li>(イ) 在外日本人</li> <li>(ウ) 帰国日本人</li> </ul> </li> </ul> </li> </ul> </li> <li>2 保健・医療の国際協力 <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 国際協力の意味</li> <li>(2) 国際協力の種類(開発と国際救援)</li> <li>(3) 国際協力のしくみ</li> <li>(4) 国際協力活動における看護の役割</li> </ul> </li> <li>3 開発協力と看護 <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 開発協力の概況と健康</li> <li>(2) 貧困と健康</li> <li>(3) ジェンダー・感染症と健康</li> <li>(4) 政府開発援助(ODA)を通じた開発途上国援助</li> </ul> </li> <li>4 国際救援と看護 <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 国際救援の定義</li> <li>(2) 国際救援活動の基本理念 <ul style="list-style-type: none"> <li>ア 災害救援の行動規範</li> <li>イ 人道憲章と災害援助に関する最低基準</li> <li>ウ 国際救援におけるガイドライン</li> </ul> </li> </ul> </li> </ul>	講義

		(3) 国際救援活動における看護の役割 (4) 国際救援活動の現状と課題 5 世界の保健・医療・福祉情勢と看護の展望	
試験	1		
評価方法	筆記試験		
必須資料 (テキスト)	系統看護学講座 専門分野 看護の統合と実践③ 災害看護学・国際看護学 (医学書院) 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学③ 基礎看護技術Ⅱ (医学書院)		
参考資料	・授業資料は適宜印刷のうえ、配布する。		
履修上の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>・災害看護の演習は、災害・救急時対応である。授業の資料テキスト等を復習し、積極的・主体的に参加すること。</li> <li>・GW や演習には積極的・主体的な参加姿勢を望む。</li> <li>・複数の講師が担当するので、出欠席は自己管理のうえ、欠席しないように授業に臨むこと。</li> </ul>		

科目名	看護管理		履修年次	2 年次
科目区分	専門分野	単位数(時間)	1 単位 ( 30 時間)	
講師名		講師の実務経験の有無	有 ・ 無	
<p>目的: 保健・医療・福祉システムにおける看護の役割と、安全で質の高い看護を提供するための管理を理解する。</p> <p>目標: 1 多(他)職種との連携・協働に必要な調整と看護師の役割を理解できる。 2 安全で質の高い看護を提供する組織の構造と管理方法を理解できる。</p>				
授 業 計 画				
単元	時間	内 容		方 法
1 看護とマネジメント	2	1 看護管理の定義・目的・機能 2 マネジメントプロセスとマネジメントサイクル 3 看護におけるマネジメントの変遷 4 組織とマネジメント (1) 組織構造と組織原則 (2) マネジメントの基本 (3) 組織目的達成のマネジメント ア 理念の形成と浸透   イ 現状分析   ウ 看護の組織化		講義
2 チーム医療の調整に必要な要素	6	1 組織の調整に必要な能力 (1) コミュニケーションの方向 (2) アサーティブ・コミュニケーション (3) パワーとエンパワーメント (4) コンフリクト (5) 変化と変革 (6) コーチング (7) 集団と組織文化 2 人材のマネジメント (1) キャリア形成とキャリア開発(キャリアディベロップメント) (2) 人材フローマネジメント (3) 労働環境 ア 看護業務管理:交代制勤務 イ 看護業務基準・手順 ウ 患者重症度と看護必要度 3 施設・設備環境及び物品のマネジメント (1) 施設・設備環境 (2) 物的資源管理の原則 (3) 物品供給システム (4) 医薬品の取扱いと管理 (5) 医療機器等の管理 (6) 廃棄物の取扱いと管理 4 情報のマネジメント (1) 種類と管理(医療情報の利活用) (2) 守秘義務とプライバシーの保護 (3) 情報開示への対応		講義

3 看護組織における看護師の協働	6	1 看護組織における看護単位の機能と特徴 2 看護ケア提供システム (1) プライマリーナーシングシステム (2) チームナーシングシステム (3) 患者受け持ち方式 (4) 機能別看護方式 (5) 他の看護ケア提供システム ア モジュール型継続受持ち方式      イ 固定チームナーシング 3 リーダーシップとマネジメント (1) リーダーシップの定義と理論 (2) メンバーシップと個の責任 ア ストレスマネジメント                      イ タイムマネジメント 4 病院・病棟における看護管理者の役割 5 日常業務のマネジメント 6 病院機能評価と看護部門の評価	講義 GW
4 安全の保障と看護管理	8	1 患者の権利と組織における安全管理 (1) 安全管理システムの設計とプロセス (2) 安全管理責任者(セーフティマネジャー)の役割と機能 2 日常の安全確保 3 医療事故対策 (1) 対象者の安全確保 (2) 医療事故と対応 (3) 院内感染対策 (4) 災害対策 4 組織としての医療安全対策 (1) 組織的な医療安全管理の考え方と安全文化の醸成 (2) 組織的な医療安全管理体制 (3) 暴力対応指針 5 わが国の医療安全対策の現状と展望 6 医療事故に対する倫理と法的問題	講義 GW
5 専門職である看護師の責任と役割	7	1 専門職としての役割 (1) 看護職と専門職性 (2) 看護職の法的責任 (3) 看護師の責務とマネジメント 2 看護師の専門性の向上 (1) 看護職の教育制度 (2) 看護職の専門性と教育 ア 看護基礎教育 イ 現任教育・継続教育 ウ 専門看護師、認定看護師、認定看護管理者 エ 特定行為に係る看護師の研修制度 オ これからの看護教育 (3) クリニカルラダーと目標管理 (4) 看護師のキャリア形成・キャリア発達 3 医療制度 (1) 医療保険制度と医療費支払いシステム (2) 看護ケアの対価	講義

		4 看護師の需要と供給、確保対策 (1)看護職員需給見通し (2)看護師等の確保対策 (3)看護師等の届出制度	
試験	1		
評価方法	筆記試験		
必須資料 (テキスト)	系統看護学講座 専門分野 看護の統合と実践① 看護管理 (医学書院) 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学① 看護学概論 (医学書院)		
参考資料	・授業資料は適宜印刷のうえ、配布する。		
履修上の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>・積極的・主体的な授業姿勢を望む。</li> <li>・看護管理は、「看護の統合と実践実習」に必須の知識である。また、看護師として働くうえでも必須の知識となる。予習のうえ、主体的に授業に臨み、授業のあとは復習をしておくこと。</li> <li>・複数の講師が担当するので、出欠席は自己管理のうえ、欠席しないように授業に臨むこと。</li> </ul>		

科目名	統合技術		履修年次	2 年次
科目区分	専門分野	単位数(時間)	1 単位 ( 30 時間)	
講師名		講師の実務経験の有無	有 ・ 無	
<p>目的: 既習の知識・技術を統合し、複数の対象の状態や状況に応じて、安全な看護を実践する基礎的能力を習得する。</p> <p>目標: 1 医療・看護における事故防止の方法を理解し、リスク感性を高めることができる。 2 複数の対象の状態を判断し、状況に応じて看護を実践する方法を習得できる。 3 自己の臨床実践能力を評価し、看護実践における課題を明確にできる。</p>				
授 業 計 画				
単 元	時 間	内 容		方 法
1 医療安全	15	1 医療安全を学ぶことの大切さ 2 医療事故・看護事故の概念と責任 (1) 医療事故と看護業務 ア 過失のある医療事故と不可抗力の事故 イ 事故の視点で捉える看護業務 (2) 看護事故の構造 ア 診療の補助に伴う医療事故 イ 療養上の世話に伴う医療事故 (3) 看護事故防止の考え方 3 事例にみる医療・看護事故の発生と防止対策 (1) 診察の補助業務における事故と防止対策 ア 注射業務           イ 注射業務に用いる機器 ウ 輸血業務           エ 内服与薬業務 オ 経管栄養業務     カ チューブ管理 (2) 療養上の世話における事故と防止対策 ア 転倒・転落事故   イ 誤嚥事故 ウ 異食事故           エ 入浴中の事故 (3) 業務領域を超えて共通する間違いと発生要因 ア 患者間違いの要因と防止 イ 間違いを誘発するタイムプレッシャーと途中中断 ウ 新人特有の危険な思い込みと行動パターン		講義 GW
2 看護の統合と実践	14	1 複数患者の看護の課題と対応 (1) 多重課題・時間的切迫と調整 (2) 作業中断と優先順位の決定 (3) 単独での援助の判断と調整 2 複数患者を把握する効果的な方法 (1) データベースアセスメント (2) 重点アセスメント (3) 迅速優先アセスメント 3 複合的な状態にある対象の看護 (1) 健康障害・治療の理解 (2) 重点アセスメント		講義 GW 演習

		ア 観察のポイント イ 現状となりゆきの推論 (3) 看護上の問題の明確化 (4) 看護計画と日々の計画立案 ア 看護上の問題の解決に必要な計画 イ 複数患者の日々の看護に必要な計画 (5) 複数患者に対する看護実践 (6) 複数患者に対する看護実践の評価 ア 臨床実践能力に必要な自己の課題	
試験	1		
評価方法	筆記試験 レポートの提出状況・内容 } 等 総合的に評価する。 GW・演習への参加姿勢 }		
必須資料 (テキスト)	系統看護学講座 専門分野 看護の統合と実践② 医療安全 (医学書院) 系統看護学講座 専門分野 看護の統合と実践① 看護管理 (医学書院) 医療安全とリスクマネジメント (ヌーヴェルヒロカワ) 看護学生のためのヒヤリハットに学ぶ看護技術		
参考資料	・授業資料は適宜印刷のうえ、配布する。		
履修上の 留意事項	・GW には指示された事前学習のみでなく、既修学習内容を自己学習のうえ、積極的な学習姿勢で臨むこと。 ・「看護の統合と実践実習」につながる科目のため、自己の体調管理に努め、欠席しないように授業に臨むこと。 ・演習は、主体的な学習姿勢と積極性が必要になる。臨地実習において自ら「考え」「行動」できるように、学内でも積極的な姿勢で臨むこと。		

科目名	臨床実践		履修年次	2 年次
科目区分	専門分野	単位数(時間)	1 単位 ( 20 時間)	
講師名		講師の実務経験の有無	有 ・ 無	
<p>目的: 多(他)職種の専門性や役割を理解し、適切に連携・協働するための基礎的知識を理解するとともに、既修の知識・技術を統合し、対象の状態に合わせて看護技術を適用する基礎的能力を習得する。</p> <p>目標: 1 対象にかかわる多(他)職種の専門性と役割を理解できる。 2 各職種の専門性を生かした連携・協働の在り方を考えることができる。 3 対象の状態に合わせて、適切に観察・看護実践ができる。 4 自己の実践した援助を客観的に振り返り、評価できる。 5 自己の臨床看護実践能力における課題を明確にできる。</p>				
授 業 計 画				
単元	時間	内 容	方 法	
1 チーム医療 と多(他)職種 連携・協働	6 (2)	1 看護と連携・協働する多(他)職種とそれぞれの役割 (1) それぞれの職種の法的責任と業務範疇 ① 医師                      ⑤ 診療放射線技師 ② 薬剤師                    ⑥ MSC ③ 理学療法士 ④ 栄養士	講義 GW	
	(4)	2 事例をとおして考える多(他)職種との連携・協働 (1) それぞれの職種の理解 (2) 各職種の専門性を生かした連携・協働の在り方と実際 3 多(他)職種との協働連携に必要な看護の役割:まとめ	GW GW 発表 講義	
2 客観的臨床実践能力評価	13 (6)	1 対象の状態に合わせた看護実践 (1) 健康障害・治療の理解 (2) 焦点アセスメント ア 観察のポイント イ 現状となりゆきの推論 ウ 必要な看護実践の決定 (3) 対象の状態に合わせた援助計画	講義 GW	
	(4)	(4) 援助の実施	OSCE	
	(3)	(5) 実践の評価:省察 ア 観察 イ 実践 ウ 臨床実践能力に必要な自己の課題	GW	
試験	1			
評価方法	筆記試験 レポートの提出状況・提出内容 GW への参加姿勢 技術試験(客観的臨床実践能力評価)		総合的に評価する。	
必須資料 (テキスト)	1年次・2年次に使用したテキスト全般			

<p>参考資料</p>	<p>&lt;参考テキスト&gt;  看護カンファレンス 第3版 (医学書院)  チーム医療論 (医歯薬出版)</p> <p>・授業資料等、必要な場合は、適宜印刷のうえ、配布する。</p>
<p>履修上の 留意事項</p>	<p>・「多(他)職種連携」の GW は、看護と連携する多職種の役割を深く学ぶ。主体的な学習姿勢と、積極的な参加姿勢を望む。</p> <p>・1年次の看護共通基本技術Ⅱ(コミュニケーション:チームコミュニケーション)を十分に復習のうえ、授業に臨むこと。</p> <p>・「客観的臨床実践能力評価」は、より臨床に近い形で、看護師のように考え、行動することを評価する。GW 前には、該当する箇所の既修の知識(1年次・2年次)を各自が自己学習のうえ、GW には参加すること。</p> <p>・主体的な学習姿勢と、積極的な参加姿勢を望む。</p> <p>・授業・GW には、これまで学習したテキスト・資料等が必要になる。予習のうえ、主体的に学習に臨むこと。</p>